

酒造りの町として栄え、白壁の建物が残る御船町御船の本町通りで、築130年を超える蔵が、建物を生かしたカフェに生まれ変わった。崇城大(熊本市)の学生たちが改装に関わった。開店に合わせインターネット上の仮想空間「メタバース」と実店舗の両方でイベントを開催し、魅力を発信した。(内村大作)

「長い歴史の中で残った貴重な白壁。実際に訪れて見てほしい」。開業前の10月21日、メタバースのアプリ「クラスタ」上に再現された土蔵カフェ「タイガーカブ」。都市計画を学ぶ研究室に在籍する崇城大建築学科4年の嶋田将太郎さん(21)と金丸友祐さん(22)がアバター(分身)で登場し、来場者に呼びかけた。

木造3階建ての白壁の外装、カウンターや座敷がある内装を再現した。カウンターには、店で提供する本物さながらのチーズケーキやオムライスまで並べた。約100人が仮想空間の店を見て回り、2人の話を耳を傾けた。

23日の開業を経て、今度は実際の店舗で28日に記念イベントを開いた。2人は現実世界で改装の苦労を語り、土壁、梁などを見せる改装を終えた蔵の見所を案内した。

参加者にメタバースも体験してもらい、「店に来られない人にも伝わり、現地に行くきっかけになる」と狙いを語った。今回は本物のケーキやビールでもてなした。

築130年の土蔵

カフェに変身

白壁の町・御船 崇城大生改装、催し



カフェで実際に開かれた記念イベント



①メタバース空間に再現されたカフェ。大勢のアバターが集まった②メタバース空間には白壁の外観も再現された

御船町の酒造りは江戸時代後期に始まった。明治、大正に盛んとなり、御船川沿いの本町通りには白壁土蔵の酒蔵や商家が並んだ。消費の低迷もあって酒造りは廃れ、河川改修などで白壁の建物は少なくなった。

カフェとなった蔵は1988年(明治20年)頃に建てられた。呉服店や酒蔵を経て、1982年に今の所有者が入居し、バイク店兼自宅に利用してきた。孫の倉岡虎之介さん(25)が店長となり、蔵の良さを生かしたカフェの開業を計画。設計施工を請け負った「ひとちいき計画ネットワーク」(熊本市)の建築士が崇城大で講師をしており、研究室の2人に声をかけた。

嶋田さんらは5、7月、毎月

仮想とリアル熊本でも開催

12、19日上通のカフェで

崇城大の古賀都市計画研究室は12、19日、熊本市・上通のカフェ「オモケンパーク」を舞台に、同様の仮想とリアルとの催しを開催する。メタバース空間では12日午後5～8時、スマートフォンなどのアプリ「クラスタ」

日のように御船町に通い、カウンターの設置や、特徴的な梁の仕上げなどの作業を担当。古い建物でゆがみもあり、なかなか描いた図面通りにならない苦勞したという。

2人の研究テーマは仮想空間を活用した商店街のまちづくり。蔵のPRにも生かそうと思いつき、町から戻ると設計図から仮想空間を構築する作業に打ち込んだ。倉岡さんは「歴史ある蔵をどう残し、知ってもらうかがカフェの狙い。学生たちの取り組みはありがたい」と感謝する。

県や町の教育委員会によると、蔵は2016年の熊本地震で壁が崩れる被害を受け、未指定文化財を対象にした補助金を活用して復旧した。今後、国登録有形文化財を目指すことになるという。

水曜定休。問い合わせはタイガーカブ(096・2000・82882)へ。

19日午後6～9時には実店舗でライブや講演、交流会を予定。申し込みはQRコードから。

仮想空間で店舗再現 魅力PR

午後5～8時、スマートフォンなどのアプリ「クラスタ」から。

